



平成29年度 第1回 太平洋いわし類・マアジ・さば類長期漁海況予報

— 別表の水産関係機関が検討し国立研究開発法人水産研究・教育機構
中央水産研究所がとりまとめた結果 —

今後の見通し(平成29年8月~12月)のポイント

海況

黒潮はC型基調で推移するが、8月~9月に一時的にB型となる。沿岸水温は、遠州灘以西で「平年並」~「高め」、駿河湾~伊豆諸島北部海域は9月に「高め」~「極めて高め」、10月以降に「平年並」~「低め」で暖水波及時に「高め」で推移する。

※1 黒潮を遠州灘沖から伊豆諸島周辺海域の流路で分類する

B型：八丈島の北を通過、流路南端が北緯32度以北で33度以南

C型：八丈島の南を通過

※2 平年並=平年値±0.5℃程度、低め=平年値-1.5℃程度、

高め=平年値+1.5℃程度、極めて高め=平年値+2.5℃程度

漁況(来遊量予測)

マイワシ

相模湾以西では前年並~下回る海域が多いが、房総以北では前年を上回る。

カタクチイワシ

前年並~下回る。

ウルメイワシ

前年を下回る。

マアジ

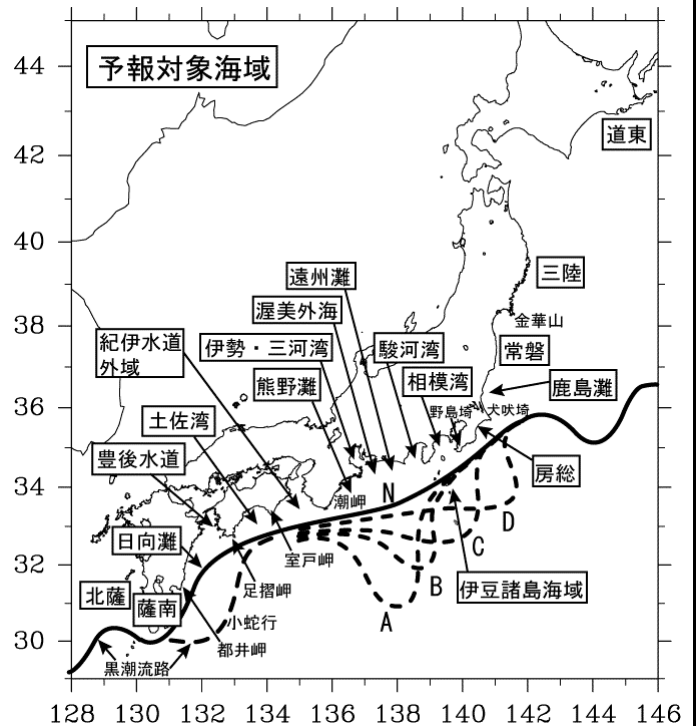
熊野灘以西は前年並~上回る、

相模湾は前年を下回る。

マサバ・ゴマサバ

マサバは前年並。

ゴマサバは前年を下回る海域が多い。



問い合わせ先

国立研究開発法人 水産研究・教育機構 中央水産研究所

担当：業務推進部 野上、市橋

漁況：資源管理研究センター 錢谷、古市、上村、入路、亘、由上

海況：海洋・生態系研究センター 杉崎、清水

電話：045-788-7615、ファックス：045-788-5001

当資料のホームページ掲載先URL

<http://abchan.fra.go.jp/>

中央ブロック海況予報

今後の見通し（2017年8月～12月）

(1) 黒潮（注：黒潮流型は図1を参照のこと）

◎潮岬以西

- ・足摺岬沖の小蛇行は東進し、8月中旬から潮岬沖を通過する。
- ・都井岬沖では、9月まで接岸傾向で推移し、10月からは離岸傾向になる。ただし、小蛇行の明確な形成はみられない。

◎潮岬以東

- ・C型基調で推移するが、8月～9月に一時的にB型となる。
- ・房総沖では、離岸傾向であるが、一時的に接岸傾向となる。

(2) 薩南～房総沿岸域

- ・室戸岬以西では、一時的な暖水波及がある。
- ・紀伊水道外域は、8月中旬～9月には暖水波及は少ない。10月以降は一時的な暖水波及がある。
- ・熊野灘～遠州灘では、暖水が波及することが多い。
- ・駿河湾～伊豆諸島北部海域では、9月は暖水が波及する。10月以降は冷水域に覆われるが、一時的な暖水波及がある。
- ・伊豆諸島南部海域は、概ね冷水域に覆われるが、一時的に暖水域に覆われることがある。

(3) 鹿島灘～常磐南部海域

- ・常磐南部海域の下層を中心に冷水の影響がある。
- ・表層では黒潮の変動に伴い暖水が波及することがある。

(4) 沿岸水温

- ・潮岬以西は、「平年並」～「高め」で推移する。
- ・熊野灘～遠州灘は、「平年並」～「高め」で推移し、一時的に「極めて高め」になる。
- ・駿河湾～伊豆諸島北部海域は、9月は「高め」～「極めて高め」で推移する。10月以降は「平年並」～「低め」で推移し、暖水波及時に「高め」となる。
- ・伊豆諸島南部海域は、概ね「低め」で推移するが、一時的に「高め」となることがある。
- ・房総沖では、黒潮の離接岸により「やや低め」～「やや高め」で推移する。
- ・鹿島灘では、「平年並」～「やや高め」で推移する。
- ・常磐南部海域は、下層で「やや低め」で推移する。

※ 平年並＝平年値±0.5℃程度、（やや高め、やや低め）＝平年値±1.0℃程度、
（高め、低め）＝平年値±1.5℃程度、（極めて高め、極めて低め）＝平年値±2.5℃以上

経過（2017年3月～7月）（注：経過は図2を参照のこと）

(1) 黒潮

- ・3月上旬、冷水域が遠州灘沖と房総沖にあり、伊豆諸島の西側で北上して八丈島付近を流れ、伊豆諸島の東側で南下する流路であった。
- ・3月中旬、伊豆諸島に冷水域が移動し、C型となった。
- ・5月中旬、房総沖に冷水域が移動し、伊豆諸島の東側で蛇行する流路となった。
- ・5月下旬、小蛇行が潮岬沖を通過し、伊豆諸島の西側でも蛇行が発達し始めた。このため、冷水域が遠州灘沖と房総沖にあり、伊豆諸島の西側で北上して八丈島付近を流れ、伊豆諸島の東側で南下する流路となった。
- ・6月下旬、房総沖では接岸して、B型となった。
- ・7月上旬、C型となった。

(2) 薩南～房総沿岸域

◎薩南海域

- ・黒潮北縁の月平均位置は、3月は屋久島南付近の平均的な位置、4月は離岸、5月は屋久島南付近の平均的な位置、6月は接岸で推移した。
- ・3月～5月中旬、小蛇行の内側で冷水域となった。

◎潮岬以西

- ・3月、都井岬沖で2月下旬に形成された小蛇行が発達した。
- ・4月下旬～6月上旬、都井岬沖の小蛇行の一部が東進し、都井岬～潮岬沖を通過した。
- ・7月上旬、都井岬沖の小蛇行が東進を始め、都井岬沖の黒潮は接岸し始めた。

◎潮岬以東

- ・3月～6月、熊野灘～遠州灘は、概ね冷水域に覆われた。
- ・3月上旬、伊豆諸島北部に黒潮の南北変動により暖水が波及した。
- ・4月下旬、南方から熊野灘～遠州灘へ暖水が波及した。
- ・5月下旬、南方から熊野灘～遠州灘へ暖水が波及した。
- ・6月中旬～下旬、伊豆諸島北部に黒潮の南北変動により暖水が波及した。
- ・7月上旬～中旬、伊豆諸島北部海域から遠州灘へ暖水が波及し、小暖水渦となって停滞した。
- ・伊豆諸島南部海域は、3月中旬～5月上旬、7月は概ね冷水域に覆われたが、それ以外の期間は黒潮の南北変動により暖水域に覆われていた。
- ・房総沖での黒潮は、6月中旬までは概ね離岸で推移し、6月下旬～7月上旬は接岸傾向となった。

(3) 鹿島灘～常磐南部海域

- ・3月～4月、沿岸域に冷水が南下したが、沖合域は広く暖水に覆われた。
- ・5月～6月、全域的に暖水の影響が継続している。
- ・7月、常磐南部海域の沿岸部に冷水の影響がみられる。

現況 (2017年7月24日現在)

(1) 黒潮

- ・ C型流路である。
- ・ 足摺岬沖を小蛇行が東進していて、東端は紀伊水道沖に達している。

(2) 薩南～房総沿岸域

◎潮岬以西

- ・ 黒潮は、都井岬沖で「やや離岸」、足摺岬沖で「著しく離岸」、室戸岬沖で「かなり離岸」、潮岬沖で「接岸」している。

◎潮岬以东

- ・ 遠州灘沖に小暖水渦がある。
- ・ 相模湾～伊豆諸島北部海域には冷水域がある。

(3) 鹿島灘～常磐南部海域

- ・ 鹿島灘は高温傾向で、常磐南部海域の沿岸部は低温傾向である。

※ 黒潮の離接岸に関する語句表記は、川合英夫(1972)：海洋物理Ⅱ、東海大学出版会に準じた。

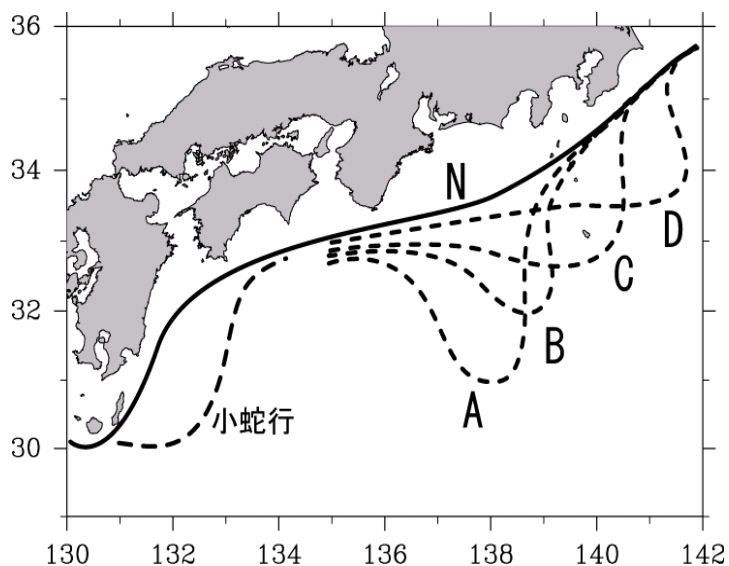


図1 黒潮流型の分類

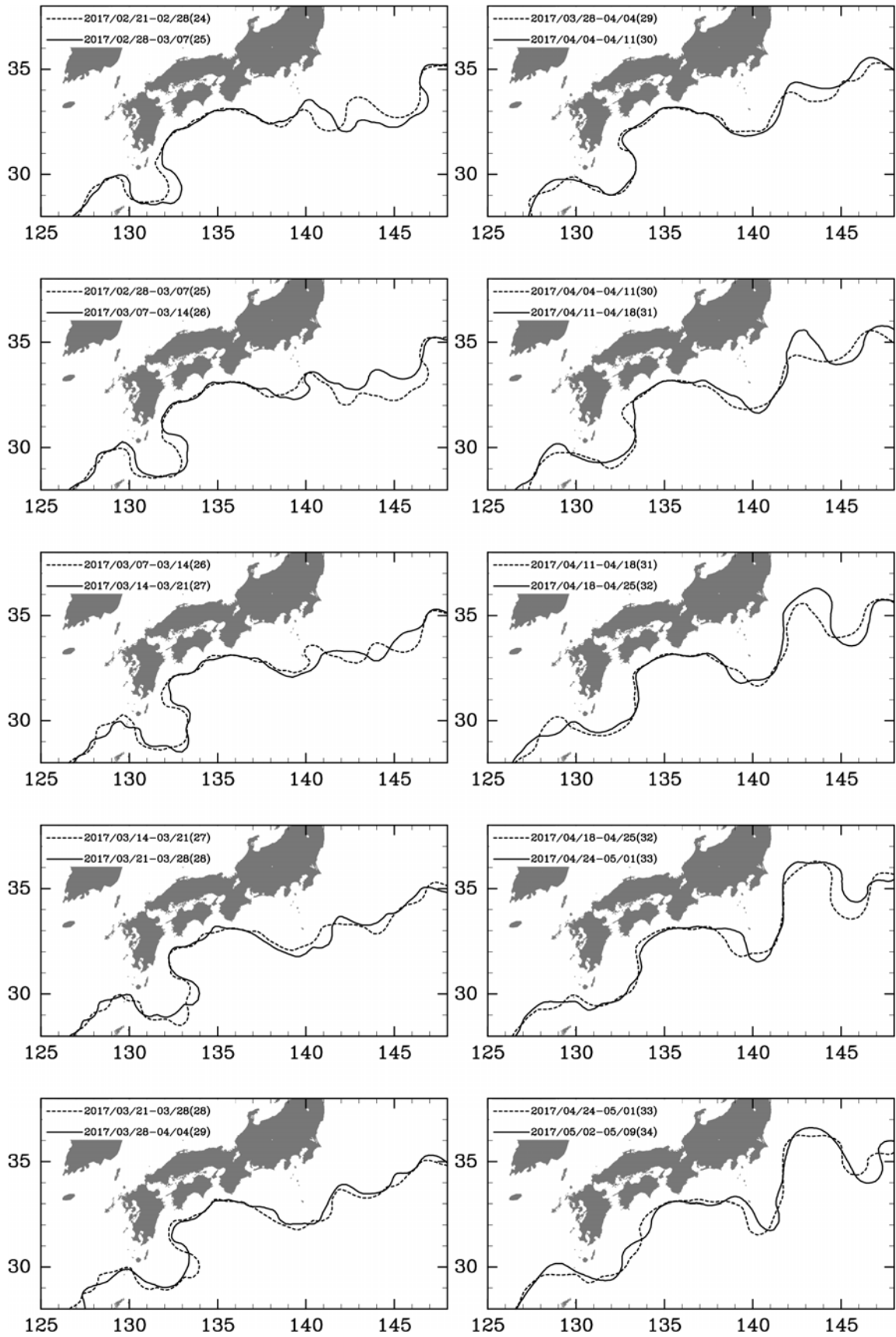


図2 黒潮流軸のパターン

(2017年3月~7月、海上保安庁海洋情報部海洋速報より作成)

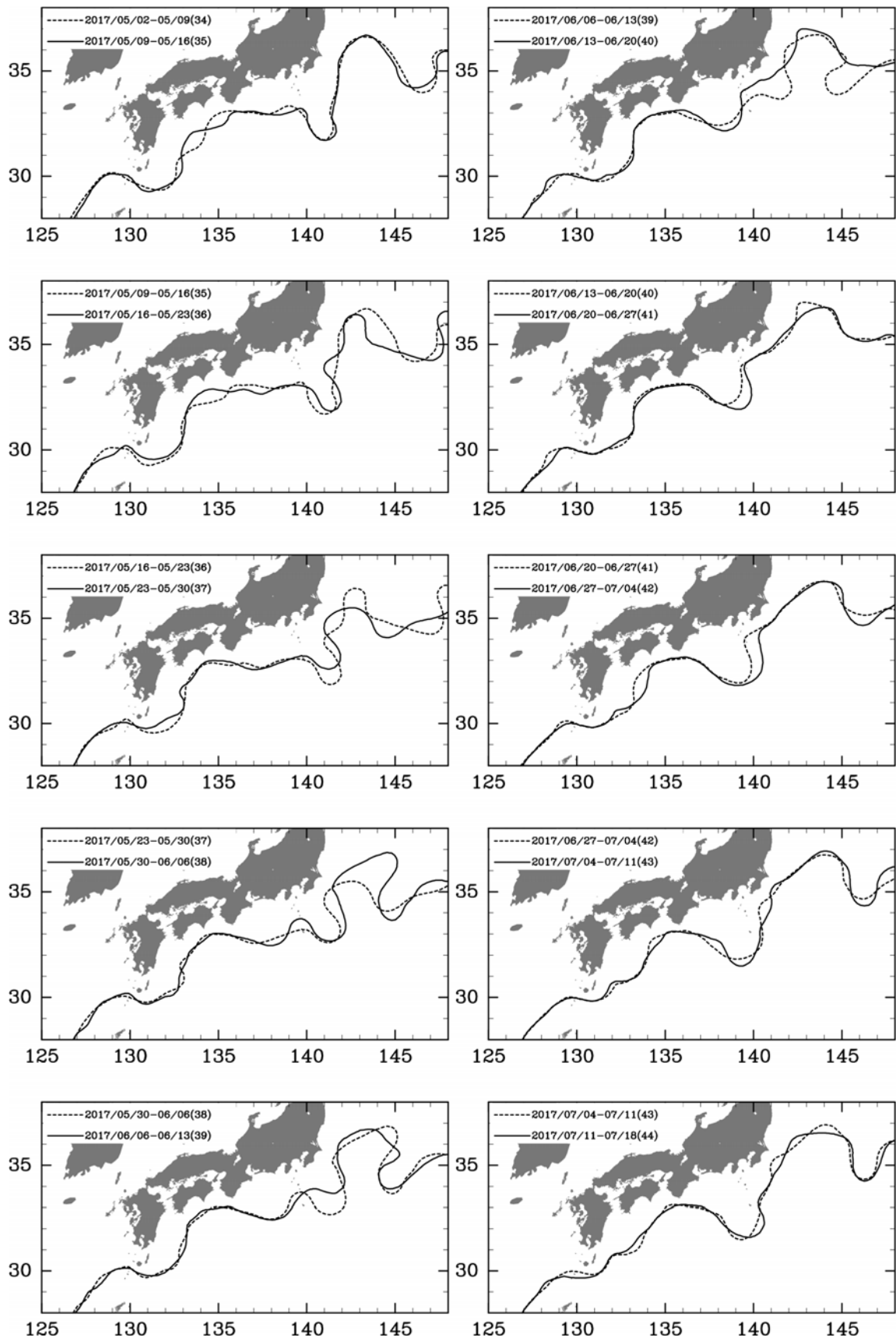


図2 (つづき) 黒潮流軸のパターン

(2017年3月~7月、海上保安庁海洋情報部海洋速報より作成)

マイワシ太平洋系群等の漁況予報

今後の見通し（2017（平成29）年8月～12月）

対象海域：北薩～三陸海域、道東海域

対象漁業：まき網、定置網、船曳網

対象魚群：0歳魚（2017（平成29）年級群）、1歳魚（2016（平成28）年級群）、
2歳魚（2015（平成27）年級群）、3歳魚（2014（平成26）年級群）、
4歳（2013（平成25）年級群）以上。年初に加齢。魚体は被鱗体長。

1. 北薩～熊野灘（まき網、定置網）

(1) 来遊量：北薩～豊後水道西側では前年を下回る。豊後水道東側では前年を上回る。宿毛湾、土佐湾では前年を下回る。紀伊水道外域西部では前年並。紀伊水道外域東部では前年を下回る。熊野灘では前年並～上回る。

(2) 漁期：期を通じて漁獲される。

(3) 魚体：12 cm～18 cm の0歳魚主体、18 cm以上の1歳以上も漁獲される。

2. 伊勢・三河湾～相模湾（まき網、定置網、船曳網）

(1) 来遊量：伊勢・三河湾、渥美外海では前年を下回る。駿河湾、相模湾西部では前年を上回る。相模湾東部では前年を下回る。

(2) 漁期：期を通じて漁獲される。

(3) 魚体：10 cm～15 cm の0歳魚主体、16 cm～20 cm の1歳魚も漁獲される。

3. 房総～三陸海域、道東海域（まき網、定置網）

(1) 来遊量：前年を上回る。

(2) 漁期・漁場：8月～9月には房総海域、三陸海域、道東海域、10月には道東海域、三陸海域、11月～12月には三陸～房総海域で漁場が形成される。定置網は、各地で期を通じて断続的に漁獲される。

(3) 魚体：10 cm～15 cm 前後の0歳魚、16 cm～18 cm の1歳魚、18 cm～19 cm の2歳魚、19 cm～21 cm の3歳魚、22 cm 以上の4歳以上が漁獲される。

漁況の経過（2017年4月～6月）および見通し（2017年8月～12月）についての説明

1. 資源状態

マイワシ太平洋系群の資源量は、1980年代は1000万トン以上の高い水準で推移したが、1990年代に入って急減し、2002年以降2007年まで10万トン前後の低い水準で推移した。その後、2008年～2014年に比較的良好な加入が続いたこと、および漁獲圧が低下したことにより資源量は増加し、2014年には100万トンを上回った。さらに2015年の極めて高い加入量および2016年の高い加入量により資源量は増加し、2016年は212万トンと推定された。

2013年級群（4歳）以上は、本年前期（2017年4月～6月）における漁獲状況が前年を大きく上回っており、高い豊度を示している。残存資源は前年同期を上回っていると考えられ、今期も引き続き漁獲対象になると見込まれる。

2014年級群（3歳魚）は、平成29年度資源評価において、加入量が160億尾と推定されており、近年において比較的高い値となっている。また、本年前期における3歳魚としての漁獲状況は前年を大きく上回っていたなど、高い豊度を示している。以上から、残存資源は2013年級群の同時期を上回ると考えられる。

2015年級群（2歳魚）は、加入量が403億尾と推定されており、極めて高い値となっている。本年前期における2歳魚としての漁獲状況は前年を下回っていたが、加入量は極めて高い水準であることから、残存資

源は2014年級群の同時期を上回ると考えられる。

2016年級群（1歳魚）は、本年前期における1歳魚としての漁獲状況については前年を下回っていたが、加入量が229億尾と推定されており、2015年級群には及ばないものの高い値となっている。以上を踏まえると、残存資源は、2015年級群の同時期を下回るものの、比較的高いと考えられる。

2017年級群（0歳魚）に対応する2017年の産卵量は531兆粒（2017年5月までの暫定値）と、2016年（346兆粒）を上回り2011年以降の高い水準にある。マシラスは、渥美外海～駿河湾において前年を上回る漁獲が見られ、多く出現している。沖合域の調査では、5月～6月の移行域調査（中央水研）に基づく加入量指数が91.9と、前年（102.6）を下回るものの、2010年以降の高い水準を維持した。6月～7月のサンマ調査（東北水研）に基づく移行域～親潮域0歳魚分布量は、前年を上回っていた。0歳魚としての漁獲状況については、房総以西の各地ですでに漁獲の主体となっているが、前年を下回る漁獲となっている。これらの情報から、現時点では不確実であるが、2017年級群の加入量水準は2016年級群を下回るものの比較的高いと考えられる。

2. 来遊量、漁期・漁場、魚体

(1) 北薩～熊野灘（まき網、定置網）

・来遊量：近年の漁獲状況から、今期の主な漁獲対象は0歳魚（2017年級群）である。北薩、薩南、日向灘、豊後水道南部西側では、冬季から春季において、親魚と考えられる1歳魚の漁獲量が前年を下回っており、4月以降0歳魚の漁獲も低調に推移している。したがって、来遊量は前年を下回ると考えられる。豊後水道南部東側では、前期の0歳魚の漁獲量は前年を下回っているものの、6月中旬以降の好漁を踏まえると、来遊量は前年を上回ると考えられる。宿毛湾、土佐湾では、前期の0歳魚の漁獲量が前年を下回っていることから、0歳魚の来遊量は前年を下回ると考えられる。期の後半には1歳（2016年級）以上も来遊するが、現段階では予測が困難である。以上を踏まえ、全体としての来遊量は前年を下回ると考えられる。紀伊水道外域西部では、前期の0歳魚の漁獲量は前年を上回っているが、4月～6月の漁獲量と8月～12月の漁獲量に関連性が見られないこと、例年、今期に相当する時期にはほとんど漁獲がないことから、来遊量は前年並と考えられる。紀伊水道外域東部では、前期の漁獲が低調に推移していることから、来遊量は前年を下回ると考えられる。熊野灘では、6月の定置網は0歳魚を主体に前年を上回ったが、早生まれ群（早期に逸散する傾向がある）も多く、0歳魚の来遊量が前年を上回るかどうかは現時点で判断できない。一方で、前年には見られなかった小型の1歳魚が前期の定置網で見られており、今後のまき網漁場への来遊が期待されることから、全体としての来遊量は前年並～上回ると考えられる。

・漁期・漁場：各海域とも期を通じて漁獲される。

・魚体：近年の出現状況から、主体となる0歳魚は12 cm～18 cm。1歳以上は18 cm以上。

(2) 伊勢・三河湾～相模湾（まき網、定置網、船曳網）

・来遊量：近年の漁獲状況から、今期の主な漁獲対象は0歳魚であり、1歳魚も漁獲される。伊勢・三河湾、渥美外海では、前期のマシラス漁獲量が高水準であったことから、成長して漁獲対象となる0歳魚も高水準と見込まれる。しかし、今年の魚体が前年より小さいことから、0歳魚の来遊量は好調であった前年を下回ると考えられる。1歳魚は、近年の来遊量はわずかであることから今期も前年並となり、全体としての来遊量は前年を下回ると考えられる。駿河湾、相模湾西部では、3月下旬以降にマシラスが多く漁獲されており、今後成長して0歳魚として漁獲対象になると見込まれる。1歳魚は比較的高い豊度と考えられており、全体としての来遊量は前年を上回ると考えられる。相模湾東部では、前期のマシラス漁獲量が前年を下回ったことから、今期の来遊量は前年を下回ると考えられる。

・漁期・漁場：各海域とも期を通じて漁獲される。

・魚体：近年の出現状況から、主体となる0歳魚は10 cm～15 cm、1歳魚は16 cm～20 cm。

(3) 房総～三陸海域、道東海域（まき網、定置網）

・来遊量：各年級群の資源状態と近年の漁獲状況から、今期の漁獲対象は1歳魚～3歳魚（2016年級群～2014年級群）および4歳（2013年級群）以上である。0歳魚は、房総海域で8月～9月に漁獲され、常磐以北では漁期終盤に混じる。3歳魚および4歳以上は、前期の漁獲量が前年を上回ったことから、来遊量は前年を上回ると考えられる。2歳魚は、近年では最も資源水準が高い年級群と推定されており、来遊量は前年を上回ると考えられる。1歳魚は、5月下旬以降主体となって漁獲されており、前年並の来遊があると考えられる。0歳魚は、移行域調査の結果において、近年の高い加入量水準を維持しているものの前年を下回ると推定されていることから、来遊量は前年を下回ると考えられる。全体としては前年を上回ると考えられる。

・漁期・漁場：近年の魚群の来遊状況から、まき網は、8月～9月には房総海域、三陸海域、道東海域、10月には道東海域、三陸海域、11月～12月には三陸～房総海域で漁場が形成される。定置網は、各地で期を通じて断続的に漁獲される。

・魚体：近年の出現状況から、0歳魚は10 cm～15 cm前後、1歳魚は16 cm～18 cm、2歳魚は18 cm～19 cm、3歳魚は19 cm～21 cm、4歳以上は22 cm以上。

カタクチイワシ太平洋系群等の漁況予報

今後の見通し（2017（平成29）年8月～12月）

対象海域：北薩～三陸海域、道東海域

対象漁業：まき網、定置網、船曳網

対象魚群：0歳魚（2017（平成29）年級群）、1歳魚（2016（平成28）年級群）、
2歳魚（2015（平成27）年級群）。年初に加齢。魚体は被鱗体長。

1. 西薩～常磐南部のシラス（船曳網）

(1) 来遊量：西薩～紀伊水道では予測が困難。伊勢・三河湾、渥美外海では前年を下回る。遠州灘～駿河湾では前年並～下回る。相模湾では前年を上回る。鹿島灘～常磐南部では前年並～上回る。

(2) 漁期：期を通じて漁獲される。

2. 北薩～紀伊水道外域（まき網、定置網）

(1) 来遊量：北薩、薩南では前年並。日向灘では前年を下回る。豊後水道西側では前年並。豊後水道東側、宿毛湾・土佐湾では前年を下回る。紀伊水道外域ではまとまった漁獲がない。

(2) 漁期：期を通じて漁獲される。

(3) 魚体：9 cm以下の0歳魚および10 cm～13 cmの1歳魚。

3. 熊野灘～相模湾（まき網、定置網、船曳網）

(1) 来遊量：熊野灘ではまとまった漁獲がない。伊勢・三河湾、渥美外海では前年を下回る。駿河湾、相模湾西部では前年並～下回る。相模湾東部では前年を下回る。

(2) 漁期：期を通じて漁獲される。

(3) 魚体：10 cm以下の0歳魚主体に11 cm～13 cmの1歳魚が漁獲される。

4. 房総～三陸海域、道東海域（まき網、定置網）

(1) 来遊量：房総・常磐海域では前年並～下回る。三陸海域では前年を下回る。道東海域ではまとまった漁獲がない。

(2) 漁期・漁場：常磐～房総海域の1そうまき網は12月以降。道東のまき網は9月～10月。

三陸の定置網、常磐南部・鹿島灘の小あぐりおよび房総沿岸海域の2そうまき網は全期間。

(3) 魚体：0歳魚は11 cm以下、1歳魚は12月で12 cm～13 cm。

漁況の経過（2017年4月～6月）および見通し（2017年8月～12月）についての説明

1. 資源状態

カタクチイワシ太平洋系群の推定資源量は1998（平成10）年から2010（平成22）年まで70万トン～150万トンで推移し、2016（平成28）年の資源量は19万トンと推定された。資源水準は低位、動向は5年間で減少傾向である。本系群は漁場が形成される沿岸域だけでなく黒潮親潮移行域まで広く分布する。

2015年級群（2歳魚）は、2015年漁期に伊勢湾以東の海域でシラス漁況が好調であったが、その後の漁

獲に反映されていない。2016年のサンマ調査（東北水研、6月～7月）および同年の秋季浮魚調査（中央水研、9月～10月）において10 cm以上の魚体で漁獲されており、現存量、有漁点（漁獲のあった調査点）CPUEはいずれも低水準であった。2016年11月～2017年6月の常磐・房総海域での12 cm以上の魚体（2歳魚主体）の漁獲量は0.3千トンで、前年同期（0.1千トン）を上回ったものの、低い水準であった。これらの動向から、2015年級群は低水準であり、今後もほとんど漁獲対象とならないと考えられる。

2016年級群（1歳魚）は、2016年漁期のシラス漁況が低調で前年を下回ったが、0歳魚を主対象とする2016年秋季の房総沿岸2そうまきの漁獲量、西日本海域における0歳魚（2016年級群）の漁獲量は前年を上回った。しかし、1歳魚としての漁獲量は前年並～下回った。沖合域では、2016年の秋季浮魚調査（中央水研、9月～10月）における9 cm以下の魚体での推定現存尾数および有漁点CPUEは低水準であった。また、2017年のサンマ調査（東北水研、6月～7月）で漁獲された10 cm以上の推定現存尾数も前年並の低い水準であった。2016年11月～2017年6月までの常磐房総海域での11 cm以下（1歳魚主体）の漁獲量は3.8千トンで、1999年以降最低であった。以上の状況から、2016年級群の残存資源量は少ないと考えられる。

2017年級群（0歳魚）は、2017年春季のシラス漁況において、前年を上回った。2017年のサンマ調査（東北水研、6月～7月）における9 cm以下の推定現存尾数は2.3億尾で、2001年以降最低であった。以上のように、不確実性は高いものの、沖合回遊群は低水準と考えられる。

2. 来遊量、漁期・漁場、魚体

(1) 西薩～常磐南部のシラス（船曳網）

紀伊水道以西における2017年4月～6月のシラス漁獲量は前年を上回ったが、今期は、現段階で根拠となる情報が得られておらず来遊量の予測は困難である。伊勢・三河湾、渥美外海では、伊勢湾内の卵稚仔調査結果による卵採集数が少ないこと、2017年6月までに漁獲されたカタクチイワシの体長が前年より小型であるため、今後も産卵量の増加は期待できないと予測され、前年を下回る。遠州灘～駿河湾では、今年の漁獲パターンから、前年並～下回ると予測される。相模湾では、前年より産卵量が多い傾向にあるため、前年を上回る。鹿島灘～常磐南部では、シラスの親魚となるカタクチイワシ資源が低水準で、直近の卵稚仔調査によって採集されたカタクチイワシが前年並に少なかったが、今後、犬吠埼沖での黒潮の離接岸変動による暖水波及と同時にシラスの来遊が期待されることから、前年並～上回る。

(2) 北薩～紀伊水道外域（まき網、定置網）

北薩、薩南海域では、今期の漁獲の主体となる1歳魚（2016年級群）の、2017年4月～6月における漁獲量が前年並であったことから前年並。日向灘における今期の主たる漁獲対象は、2010年以降、沿岸発生群である。日向灘での7月～12月の漁獲量は、1月～6月の日向灘中部のシラス漁獲量と正の関係が認められており、2017年1月～6月の日向灘中部のシラス漁獲量が前年を下回ったことから、来遊量は前年を下回る。豊後水道西側では、8月～10月の漁獲量と4月～6月の宮崎県シラス漁獲量に正の関係が認められ、その推定値は前年を上回る結果となったが、2017年1月～6月における1歳魚（2016年級群）主体の漁獲量が前年を下回ったことから、総じて来遊量は前年並。豊後水道東側では、周辺海域で発生したと推定される個体が漁獲の主体となる。2017年4月～6月のカタクチシラスの水揚量が前年を下回っているこ

とから、来遊量は前年を下回る。宿毛湾・土佐湾では、宿毛湾の1月～6月の小型まき網における「かえり」銘柄の水揚量と7月～12月の中型まき網の水揚量に同様の変動傾向が認められる。2017年1月～6月の小型まき網における「かえり」銘柄の漁況は前年を大幅に下回ったことから前年を下回る。紀伊水道外域では未成魚・成魚は主たる漁獲対象ではないため、まとまった漁獲は無い。

(3) 熊野灘～相模湾（まき網、定置網、船曳網）

熊野灘ではまとまった漁獲がない。伊勢・三河湾、渥美外海では、今期の漁獲の主体は0歳魚（2017年級群）と考えられる。2001年以降、4月～6月の伊勢・三河湾、遠州灘～駿河湾におけるカタクチシラス漁獲量と7月～12月の0歳魚の漁獲量には正の関係が見られ、今期の伊勢・三河湾、遠州灘～駿河湾におけるカタクチシラス漁獲量は前年並であった。伊勢・三河湾、渥美外海では、0歳魚（2017年級群）の魚体が前年より小型で、秋以降に加入すると考えられる伊勢湾内でのカタクチイワシの卵の採集数も少ないことから、総じて前年を下回る。駿河湾、相模湾西部では、近年の傾向から、駿河湾ではほとんど水揚げがなく、12月以降に相模湾西部の定置網に入網が始まると予測されるが、カタクチイワシ太平洋系群の資源水準が低いと判断されていることから、前年並～下回る。相模湾東部では、近年の漁獲傾向から今期は0歳魚（2017年級群）が漁獲の主体となると考えられ、来遊量は前年を下回る。

(4) 房総～三陸海域、道東海域（まき網、定置網）

2016年11月～2017年6月の常磐・房総海域における漁獲量（千葉県、茨城県、福島県の合計）は4.1千トンで、前年（6.2千トン）を下回った。1歳魚（2016年級群）と想定される11cm以下の小型魚は、1999年以降最低、2歳魚（2015年級群、12cm以上）の漁獲量は1999年以降で最低となった前年を上回ったものの非常に低い水準であった。今後の漁獲対象となる1歳魚（2016年級群）は前年を下回ると考えられる。

道東海域では、調査船調査によるCPUEは近年と同様に低くなっており、マイワシ・サバ類を対象とした棒受け網漁業への混獲情報もほとんど聞かれないことから、来遊量は低く推移すると考えられる。

常磐・房総海域では、資源水準が高ければ、南下期の12月以降から盛漁となるが、近年は漁獲が少ない。2017年1月～6月の2歳魚（2015年級群）の漁獲量は極めて少なく、1歳魚（2016年級群）の2016年12月～2017年6月の漁獲尾数は前年を下回った。九十九里海域を中心に夏秋季に漁獲対象となる0歳魚（2017年級群）、および南下回遊による0歳魚の12月以降の漁場への加入については判断材料が乏しい。以上のことから、今期の来遊量は前年並～下回る。漁場および体長については近年の傾向および最近の漁獲物の体長から判断した。

2017年3月～6月の宮城県の定置網による漁獲量は45トンで、平年同期（4,192トン）の1%であった。三陸沿岸海域の定置網には常磐・房総海域の魚群の一部も来遊すると考えられ、今漁期の主体となる1歳魚（2016年級群）は、資源水準が低いと判断されており、前年を下回ると考えられる。

道東海域ではまとまった漁獲がない。

ウルメイワシ太平洋系群等の漁況予報

今後の見通し（2017（平成29）年8月～12月）

対象海域：北薩～熊野灘

対象漁業：まき網、定置網、棒受網、多鈎釣

対象魚群：0歳魚（2017（平成29）年級群）、1歳（2016（平成28）年級群）以上。

年初に加齢。魚体は被鱗体長。

- (1) 来遊量：北薩・薩南、日向灘、豊後水道西側・東側、宿毛湾・土佐湾、紀伊水道外域西部・東部、熊野灘の全てにおいて前年を下回る。
- (2) 漁期：全期間。
- (3) 魚体：0歳魚（8 cm～20 cm）が主体となる。海域により1歳以上（20 cm以上）も対象となる。

漁況経過（2017年1月～6月）および見通し（2017年8月～12月）についての説明

1. 資源状態

ウルメイワシは沿岸性が強く、太平洋系群は本州～九州の太平洋岸沿いに分布する。漁獲の大部分を占める宮崎県～三重県の漁獲量は増減を繰り返しながらも全体としては増加傾向にあり、2011年～2016年は過去最高水準となった。1978年以降の産卵調査に基づいて求めた日向灘～潮岬（海区III）の年間産卵量は、長期的に増加傾向にあり、2016年の産卵量（134兆粒）から、資源水準は高位と判断した。最近5年間（2013年～2017年）の資源量は99千トン～160千トンの範囲にあり、その推移から、資源動向は横ばいと判断した。コホート解析では、半期（1月～6月、7月～12月）単位で寿命24月齢までの4期とし、0月齢～5月齢（0歳）を1期、6月齢～11月齢（0歳）を2期、12月齢～17月齢（1歳）を3期、18月齢～23月齢（1歳）を4期とした。産卵量は長期的に増加傾向にあり、最近年は中位～高位水準を保っている。さらに、2007年以降の資源量、親魚量、加入量は、増減を繰り返しながらも全体としては増加傾向にある。これは、再生産が順調に行われていることを示唆しており、最近年の漁獲は資源状態に悪影響を及ぼしていないと考えられる。

2. 来遊量、漁期・漁場、魚体

2017年後期（8月～12月）は0歳魚（2017年級群）主体の漁況になることが推測されるため、2017年前期（1月～6月）の漁況等から、0歳魚の加入状況を予測した。

予測対象海域に相当する鹿児島県～三重県の主要港における前期（1月～6月）水揚量と後期（8月～12月）水揚量には、強い正の関係がある。2017年前期（1月～6月）の水揚量は11千トンであった。2000年～2016年の前期（1月～6月）水揚量と後期（8月～12月）水揚量の間を用いて、2017年後期（8月～12月）の水揚量は21千トンと予測された。

2014年～2016年の後期（8月～12月）水揚量は、21千トン、28千トン、28千トンであった。従って、2017年の後期（8月～12月）水揚量は、海域全体としては前年を下回ると予測される。

北薩および薩南海域では、0歳魚（10 cm～17 cm）が主体となる。8月以降の漁獲の主体は、枕崎沖に太平洋側から来遊する群となる。5月～6月に内之浦漁協の定置網に入網するカタクチイワシとの混ざり銘柄のCPUEと8月～12月の枕崎港の水揚量には正の関係が認められ、5月～6月の混ざり銘柄のCPUEは前年より低い値を示していることから、来遊水準は前年を下回ると予測される。

日向灘では、0歳魚～1歳魚（13 cm～20 cm台）が主体となる。0歳魚の漁況と加入量指標値の間に正の関係が認められ、2017年の加入量指標値は前年を下回っていることから、来遊水準は前年を下回ると予測される。

豊後水道西側では、8月～10月は0歳魚（10 cm～15 cm）が主体となる。漁獲の主体となる0歳魚の資源量水準は、4月～6月のまき網漁獲量（0歳魚主体）が前年を下回ったことから、今期の0歳魚の来遊に期待が持てない。よって、来遊水準は前年を下回ると予測される。

豊後水道東側では、0歳魚（8 cm～16 cm）が主体となる。新規加入が認められる4月～6月と0歳魚主体の漁獲となる8月～12月の漁獲量には正の関係が認められ、4月～6月の漁獲量が前年を下回ったことから、来遊水準は前年を下回ると予測される。

宿毛湾および土佐湾では、0歳魚が主体となり、期の後半には1歳以上も漁獲される。宿毛湾の中型まき網における前期水揚量と後期水揚量の間には、概ね正の関係が認められ、前期水揚量は前年を下回っている。さらに、中型まき網および定置網における0歳魚（2017年級群）の水揚量は前年を下回っている。以上より、来遊水準は前年を下回ると予測される。

紀伊水道外域西部では、2017年4月～6月の標本漁協における漁獲量は前年および平年を下回っているため、来遊水準は前年および平年を下回ると予測される。

紀伊水道外域東部では、2011年～2016年において前期の漁獲量が年間の半分以上を占め、後期が前期の漁獲量を上回った年は2013年のみである。前期の漁獲量は前年および平年を下回ったことから、今期の来遊水準は前年および平年を下回ると予測される。

熊野灘では、0歳魚（8 cm～20 cm）および1歳以上（20 cm以上）が主体となる。例年、8月～12月に漁獲主体となるのは0歳魚であり、2010年以降は定置網の5月、6月とまき網の8月～11月の漁獲量には正の関係が認められる。0歳魚については、前期の定置網での漁獲状況が前年を下回っていることから、今期のまき網の漁獲量は前年を下回ると予測される。1歳以上については、近年、後期にもまとまった来遊がみられ、これまでの漁獲動向から前年並～上回る来遊が見込まれるが、0歳魚の減少を補うまでの来遊量は期待できない。以上より、来遊水準は前年を下回ると予測される。

マアジ太平洋系群等の漁況予報

今後の見通し（2017（平成29）年8月～12月）

対象海域：北薩～熊野灘、相模湾

対象漁業：まき網、定置網

対象魚群：0歳魚（2017（平成29）年級群）、1歳魚（2016（平成28）年級群）、
2歳魚（2015（平成27）年級群）、3歳（2014（平成26）年級群）以上。
年初に加齢、魚体は尾叉長。

1. 北薩～土佐湾（まき網、定置網）

(1) 来遊量：北薩～薩南、豊後水道南部東側、宿毛湾・土佐湾は前年を上回る。日向灘、豊後水道南部西側は前年並。

(2) 魚体：いずれの海域も0歳魚、1歳魚主体。

0歳魚は19 cm以下、1歳魚は19 cm～25 cm、2歳以上は25 cm以上。

2. 紀伊水道外域～熊野灘（まき網、定置網）

(1) 来遊量：紀伊水道外域は前年を上回る。熊野灘は前年並～上回る。

(2) 魚体：紀伊水道外域西部は0歳魚主体、紀伊水道外域東部は1歳魚～3歳魚主体。熊野灘は1歳魚および2歳以上が主体で、これに0歳魚が加わる。0歳魚は19 cm以下。1歳魚は19 cm～25 cm、2歳以上は25 cm以上。

3. 相模湾（定置網）

(1) 来遊量：前年を下回る。

(2) 魚体：主体となる0歳魚は19 cm以下、1歳魚は19 cm～21 cm。

漁況の経過（2017年1月～6月）および見通し（2017年8月～12月）についての説明

1. 資源状態

資源量は1986年以降増加し、1990年代半ばは15万トン～16万トンと高い水準で推移したが1997年以降減少し、2009年～2013年は横ばいで推移したが、その後再び減少している。加入量は1993年をピークに減少し、2009年以降2.7億尾～7.3億尾と低い水準で推移している。現在の資源量は4万トン、親魚量が2万トンまで落ち込み、資源水準は低位、動向は減少と判断される。漁獲状況は海域間で異なり、熊野灘以西の海域では低調であった前年を上回っているが、相模湾は低調な漁況が続いている。したがって来遊量の予測は各海域の漁獲状況を考慮して判断する必要がある。

2014年級群（3歳魚）の加入量は4.0億尾と評価されており、残存資源は少ない。

2015年級群（2歳魚）の加入量は過去最低水準の2.7億尾と評価されている。近年の2歳魚の中でも、資源量水準は低いと考えられ、1歳魚（2016年級群）とともに漁獲されるが残存資源は少ない。

2016年級群（1歳魚）の加入量は3.7億尾と評価されており、2015年級群を上回る。1歳魚は今期0歳魚とともに漁獲の主体となると考えられるが、2015年級群より2016年級群の加入量が多いことから、6月までの漁況は多くの海域で前年より好調に推移していると考えられる。

2017年級群（0歳魚）は、いずれの海域でも漁獲対象になる。加入量の指標となる各県地先の漁獲状況は、4月～6月の3か月間で比較した場合、宮崎県南部定置網アジ仔 CPUE、宇和島港ゼ

ンゴ CPUE、宿毛湾ゼンゴ資源量指数、串本棒受網当歳魚漁獲量（5月～6月）は前年同期を上回り、伊勢湾豆板漁業当歳魚漁獲量、伊豆東岸定置網当歳魚漁獲量は前年同期を下回っている。2017年級群の加入量は、前年同期を上回る海域が多いものの、いずれも低水準である。

2. 来遊量、漁期・漁場

本魚種は予測期間を通じて漁獲対象となる。来遊量については、海域ごとに、前期の漁況に基づき予測した。年齢別体長は、これまでの体長組成の推移から概ね次のとおりである。0歳魚：19 cm 以下、1歳魚：19 cm～25 cm、2歳魚：23 cm～27 cm、3歳以上：25 cm 以上。3歳以上は、現状では年齢に対応した体長区分は困難である。

(1) 北薩～土佐湾

北薩～薩南海域では、漁獲の主体となる0歳魚（2017年級群）および1歳魚（2016年級群）の漁獲量は今年に入り前年、平年を上回って非常に好調に推移しており、来遊量は前年を上回ると予測される。

日向灘では、0歳魚（2017年級群）が主体となる。2017年4月～6月の日向灘南部定置アジ仔CPUEと宇和海中南部まき網のゼンゴ（0歳魚）漁獲量からみて、来遊量は前年並と予測される。

豊後水道南部西側では上半期の大分県の県南定置網漁獲量が前年を下回る見込みであるが、加入量指標値に用いられている近隣県のマアジの漁獲状況は前年を上回る水準であり、今期の主体となる0歳魚（2017年級群）の来遊量は前年並と予測される。

豊後水道南部東側では、0歳魚（2017年級群）および1歳魚（2016年級群）が主体となる。新規加入が認められる5月～6月と0歳魚主体の水揚げとなる8月～12月の漁獲量には正の関係が見られることから、今期の来遊水準は前年を上回ると予測される。

宿毛湾・土佐湾では、0歳魚（2017年級群）および1歳魚（2016年級群）が主体となる。定置網およびまき網の入網調査より0歳魚が多いことから、今期の来遊量は前年を上回ると予測される。

(2) 紀伊水道外域～熊野灘

紀伊水道外域西部では、今年上半期の漁獲量は前年を上回り好調であり、下半期も好漁が期待できることから、今期の来遊量は前年を上回ると予測される。

紀伊水道外域東部では、1歳魚～3歳魚（2014年級群～2016年級群）が主体となる。黒潮が潮岬から離岸し、来遊および漁場形成条件が悪くなる可能性はあるが、上半期の漁獲量は前年を上回ったことから、今期の来遊量は前年を上回ると予測される。

熊野灘では、1歳魚（2016年級群）が主体となり、0歳魚（2017年級群）および2歳以上も混じる。定置網の漁況から0歳魚の加入は前年を下回ると考えられるが、春季の中型まき網における1歳魚の漁況が前年を上回っており、今期の来遊量は前年並～上回ると予測される。

(3) 相模湾

伊豆東岸では、0歳魚（2017年級群）が主体となる。上半期のジンダの漁獲尾数と下半期の0歳魚の漁獲尾数には正の関係が見られ、上半期のジンダの漁獲量は前年を大きく下回っている。また、上半期の1歳以上の漁獲尾数は、前年同期を上回ったものの、低水準となっており、増加の傾向はみられないことから、今期の来遊量は前年を下回ると予測される。

西湘地区では、0歳魚（2017年級群）および1歳魚（2016年級群）が主体となる。上半期の0歳魚の漁獲量は前年を大きく下回ったことから、今期の来遊量は前年を下回ると予測される。

(4) 房総～三陸南部海域の情報

房総～鹿島灘海域での北部まき網の2017年3月～6月の漁獲量は3,851トンとなり、前年同期2,019トンを上回った。5月中旬まではマサバやマイワシが一定のまとまりをみせたためマアジへの漁獲努力が低かったが、5月下旬にはマサバやマイワシの漁獲量が減少しマアジに漁獲努力が傾き一時的に水揚げがまとまった。三陸南部～仙台湾では、宮城県の2017年3月～6月の漁獲量は148トンとなり、前年を下回った。岩手県の定置網では2017年1月～6月の漁獲量は3トンで、前年、過去10年平均を大きく下回った。

マサバおよびゴマサバ太平洋系群等の漁況予報

今後の見通し（2017（平成29）年8月～12月）

対象海域：北薩～三陸海域、道東海域

対象漁業：まき網、定置網、棒受網、たもすくい等

対象魚群：0歳魚（2017（平成29）年級群）、1歳魚（2016（平成28）年級群）、
2歳魚（2015（平成27）年級群）、3歳魚（2014（平成26）年級群）、
4歳（2013（平成25）年級群）以上。年初に加齢。魚体の大きさは尾叉長。

1. 北薩～日向灘～豊後水道南部～土佐湾（まき網、定置網等）

(1) 来遊量：マサバは低水準。ゴマサバを主体とするさば類全体としては、北薩～日向灘では前年並。豊後水道南部西側では前年を上回る。豊後水道南部東側～土佐湾では前年を下回る。

(2) 漁期：期を通じて漁獲される。

(3) 魚体：ゴマサバが主な漁獲対象となり、北薩～薩南では25 cm～32 cm（1歳魚、2歳魚）主体。日向灘～豊後水道南部では20 cm～30 cm（0歳魚、1歳魚）主体。宿毛湾～土佐湾では25 cm～36 cm（1歳魚～3歳魚）主体。

2. 紀伊水道外域（まき網、定置網）

(1) 来遊量：マサバ、ゴマサバともに紀伊水道外域西部では前年を上回り、紀伊水道外域東部では前年を下回る。

(2) 漁期：期を通じて漁獲される。

(3) 魚体：マサバ・ゴマサバともに漁獲対象となり、28 cm～36 cm（2歳魚、3歳魚）主体。

3. 熊野灘（まき網、定置網）

(1) 来遊量：マサバは低水準。ゴマサバ0歳魚は前年を下回る。1歳魚は前年を上回る。2歳以上は前年を下回る。ゴマサバとしては前年を下回る。さば類全体としては前年を下回る。

(2) 漁期：期を通じて漁獲される。

(3) 魚体：ゴマサバが主な漁獲対象となり、20 cm～30 cm（0歳魚）主体に、25 cm～30 cm（1歳魚）、29 cm以上（3歳以上）も漁獲される。

4. 伊豆諸島周辺海域（棒受網、たもすくい）

(1) 来遊量：マサバは低水準。ゴマサバ1歳魚は前年を上回る。2歳魚は前年を下回る。3歳魚は前年を下回る。ゴマサバとしては前年を上回る。さば類全体としては前年を上回る。

(2) 漁期・漁場：期を通じて三宅島周辺、銭洲海域が主漁場となる。

(3) 魚体：ゴマサバが主な漁獲対象となり、25 cm～30 cm（1歳魚）、29 cm～37 cm（3歳魚）主体に、27 cm～34 cm（2歳魚）、32 cm以上（4歳以上）も漁獲される。

5. 犬吠～三陸海域、道東海域（まき網、定置網）

(1) 来遊量：マサバ1歳魚は前年を上回る。2歳魚は前年を下回る。3歳魚は前年を下回る。4歳魚は前年を上回る。マサバとしては前年並。ゴマサバは低水準。さば類全体としては前年並。

(2) 漁期・漁場：定置網は期を通じて漁獲される。まき網漁場は、8月～10月は道東海域～三陸南部、11月～12月は三陸南部～犬吠海域に主に形成される。

(3) 魚体：マサバは30 cm～33 cm（4歳魚）主体に、20 cm～32 cm（1歳魚～3歳魚）も漁獲される。ゴマサバは期前半に28 cm～34 cm前後（2歳魚、3歳魚）主体、期後半に25 cm～30 cm前後（1歳魚、2歳魚）主体に漁獲される。

漁況の経過（2017（平成29）年1月～7月）および見通し（8月～12月）についての説明

1. 資源状態

1) マサバ

資源量は1990年代～2000年代に低い水準にあったが、近年の加入量水準の高い年級群の発生と漁獲圧の低下により増加している。

2012年級群（5歳魚）は、2016年12月時点の資源評価（コホート解析）による推定加入尾数が17億尾と近年の平均程度の水準であり、高齢となっているため残存資源量は少ない。

2013年級群（4歳魚）は、推定加入尾数が99億尾と近年では卓越して高い水準であり、これまでの各地漁業で主体となって漁獲されている。1月～6月に犬吠以北海域で漁獲された魚体は28 cm～32 cm前後と、例年のこの時期に漁獲される4歳魚の魚体よりもかなり小さく、成長の遅れがみられている。残存資源量は4歳魚としては極めて多い。

2014年級群（3歳魚）は、推定加入尾数が11億尾と近年の平均を下回る水準である。これまでの各地漁業の漁獲状況では、卓越して高い水準である2013年級群の同期を大きく下回っている海域が多い。1月～6月に犬吠以北海域で漁獲された魚体は27 cm～31 cm前後と、例年のこの時期に漁獲される3歳魚の魚体よりもかなり小さく、成長および成熟の遅れがみられている。

2015年級群（2歳魚）は、推定加入尾数が13億尾と近年の平均程度の水準である。これまでの各地漁業の漁獲状況では、2014年級群の同期を下回っている海域が多い。1月～6月に犬吠以北海域で漁獲された魚体は23 cm～28 cm前後と、例年のこの時期に漁獲される2歳魚の魚体よりもかなり小さく、成長および成熟の遅れがみられている。

2016年級群（1歳魚）は、調査船調査に基づく資源量指数による推定加入尾数は、最近年のため推定値の不確実性は高いが、近年の平均を上回る水準と見込まれる。調査船調査では、2017年6月の三陸～道東沖の流し網調査（釧路水試）や5月～7月の北西太平洋北上期中層トロール調査（北上期浮魚類資源調査・移行域幼稚魚調査（東北水研・中央水研・北水研））における1歳魚としての出現は前年を上回った。

2017年級群（0歳魚）は、各地漁業で漁獲がみられており、2001年以降実施している北上期中層トロール調査における出現率（漁獲のあった調査点の割合）は54%であり、過去の同調査（17年間）で上位2番目であった。同調査漁獲物による7月時点での推定平均体長は加入豊度と相関が高いが、2017年は18.6 cmであり、過去の同調査で上位2番目であった。現時点での0歳魚の加入量水準の見積もりは不確実であるが、加入尾数は近年の平均を上回る水準と見込まれる。

2) ゴマサバ

0歳時に黒潮-親潮移行域を回遊して加入する群が資源の主な部分を占めるようになっている。

2012年級群（5歳魚）は、2016年12月時点の資源評価（コホート解析）による推定加入尾数が9.1億尾と近年の平均程度の水準である。

2013年級群（4歳魚）は、推定加入尾数が9.3億尾と近年の平均程度の水準である。

2014年級群（3歳魚）は、推定加入尾数が7.6億尾と近年の平均を下回る水準である。

2015年級群（2歳魚）は、推定加入尾数が7.8億尾と近年の平均を下回る水準である。

2016年級群（1歳魚）は、最近年のため推定値の不確実性は高いが、推定加入尾数は近年の平均程度の水準と見込まれる。これまでの各地漁業の漁獲状況では、2015年級群の同期を上回っている海域が多い。静岡県棒受網CPUEに基づく0歳魚資源密度指数（静岡水技研）は2,505であり、2015年級群の値（892）を上回った。調査船調査では、2017年5月～7月の北上期中層トロール調査における1歳魚としての出現は前年の1歳魚を上回っている。

2017年級群(0歳魚)は、定置網などの各地漁業で漁獲がみられている。調査船調査では、2001年以降実施している北上期中層トロール調査における出現率は54%であり、過去の同調査で最も高い値であった。同調査漁獲物による7月時点での推定平均体長は加入豊度と相関が高いが、2017年は18.8cmであり、過去の同調査で上位4番目であった。現時点での0歳魚の加入量水準の見積もりは不確実であるが、加入尾数は近年の平均を上回る水準と見込まれる。

2. 来遊量、漁期・漁場、魚体

1) マサバ

(1) 来遊量

資源状態の項に前述の通り、0歳魚(2017年級群)は、これまで得られている情報から加入量が近年の平均を上回る水準と考えられ、来遊量は前年並となる。1歳魚(2016年級群)は、加入量が近年の平均を上回る水準と考えられ、来遊量は前年を上回る。2歳魚(2015年級群)は、加入量が近年の平均程度の水準と考えられるが、直近までの漁況を考慮すると来遊量は前年を下回る。3歳魚(2014年級群)は、加入量が近年の平均を下回る水準であり、来遊量は前年を下回る。4歳魚(2013年級群)は、加入量が近年では極めて高い水準であり、来遊量は前年を上回る。

以上のことから本予測期間は4歳魚(2013年級群)が主体で1歳魚~3歳魚(2016年級群~2014年級群)も漁獲される。全体の来遊量は前年並と考えられる。

(2) 漁期・漁場、魚体

1月~6月の漁況は、犬吠以北海域のまき網では4歳魚主体に3歳魚も混じり前年を下回った。三陸海域の定置網などでは2歳魚~4歳魚主体に前年並の好調な漁獲がみられた。伊豆諸島周辺海域のたもすくい・棒受網(CPUE)では4歳魚主体に3歳魚も混じり前年を下回った。熊野灘以西海域では時期によりゴマサバを上回る漁獲がみられ、前年を大きく上回った。

1月~6月の漁獲量は、犬吠以北海域のまき網は94.0千トン(前年同期実績139.9千トン)であった。犬吠以北海域の定置網などは10.9千トン(同10.9千トン)、伊豆諸島周辺海域のたもすくい・棒受網は1.6千トン(同4.5千トン)、伊豆半島~駿河湾~熊野灘のまき網・定置網は38.5千トン(同16.3千トン)、紀伊水道外域~北薩の全漁業では11.3千トン(同2.4千トン)であった。(漁獲量は各地主要港水揚げ資料および水揚げ物標本測定結果等からの推定値)

魚体は、犬吠以北海域のまき網では、28cm~32cm前後の4歳魚主体に、27cm~31cm前後の3歳魚も漁獲された。産卵場である伊豆諸島周辺海域では主に三宅島周辺、銭洲海域が漁場となり、30cm~33cm前後の4歳魚主体に、28cm~32cm前後の3歳魚も漁獲された。駿河湾~熊野灘のまき網では、伊豆諸島周辺海域とほぼ同様の組成に加え、35cm以上の4歳以上も漁獲された。

今期は、犬吠以北海域のまき網、定置網での漁獲が中心となり、4歳魚主体に1歳魚~3歳魚も対象になる。5月~7月の常磐~三陸~道東海域における調査船調査では沖合を北上する魚群(4歳魚主体に1歳魚~3歳魚も)が確認されている。今期は道東海域の暖水塊が消滅していることから、魚群の南下は昨年、一昨年のように遅れる可能性は低く、まき網漁場は8月~10月は道東海域~三陸南部に、11月~12月は三陸南部~犬吠海域に形成される。各地の定置網では期を通じて断続的に漁獲される。伊豆諸島周辺海域、熊野灘、および土佐湾~豊後水道南部~薩南海域での来遊量は低水準であり、ゴマサバに混獲される程度であるが、一時的にまとまった漁獲がみられる。

年齢別体長は、これまでの体長組成の推移や年齢査定の結果から概ね次の通りである。1歳魚:20cm~25cm前後、2歳魚:23cm~30cm前後、3歳魚:29cm~32cm前後、4歳魚:30cm~33cm前後、5歳以上:33cm以上。0歳魚は例年の傾向から19cm~25cmと予測される。(各年級群の体長の範囲は広く重なり合っている)

2) ゴマサバ

(1) 来遊量

資源状態の項に前述の通り、0歳魚（2017年級群）は、これまで得られている情報から加入量が近年の平均を上回る水準と考えられ、来遊量は前年を上回る。1歳魚（2016年級群）は、加入量が近年の平均程度の水準と推定され、来遊量は前年を上回る。2歳魚（2015年級群）は、加入量が近年の平均を下回る水準であり、直近までの漁況を考慮すると来遊量は前年を下回る。3歳魚（2014年級群）は、加入量が近年の平均を下回る水準であり、来遊量は前年を下回る。4歳魚（2013年級群）は、加入量が近年の平均程度の水準であり、来遊量は前年並となる。全体の来遊量は前年を下回ると考えられる。

(2) 漁期・漁場、魚体

1月～6月の漁況は、北薩、薩南では2歳魚、3歳魚主体に前年を上回った。日向灘では1歳魚～3歳魚主体に前年を上回った。豊後水道南部では2歳魚、3歳魚主体に前年を下回った。宿毛湾、土佐湾ではまき網は2歳魚主体、釣りは2歳魚、3歳魚主体、定置網は4月以降に0歳魚主体で漁獲され、前年並であった。紀伊水道外域では2歳魚、3歳魚主体に前年を下回った。熊野灘では3歳魚～5歳魚主体に0歳魚も漁獲され、前年を下回った。伊豆諸島周辺海域では1歳魚、3歳魚主体に前年を上回った。犬吠～三陸海域では1歳魚～3歳魚がマサバに混獲され、前年を下回った。

1月～6月の漁獲量（全漁業）は、北薩～紀伊水道外域は14.8千トン（前年同期実績11.8千トン）、熊野灘～伊豆諸島周辺海域は8.6千トン（同15.4千トン）、犬吠以北海域は3.1千トン（同5.5千トン）であった。（漁獲量は各地主要港水揚げ資料および水揚げ物標本測定結果等からの推定値）

今期における各地の漁期・漁場と魚体は、北薩～薩南では1歳魚、2歳魚主体、日向灘、豊後水道南部では0歳魚、1歳魚主体、宿毛湾、土佐湾では1歳魚～3歳魚主体、紀伊水道外域では2歳魚、3歳魚主体、熊野灘では0歳魚主体に1歳魚、3歳以上混じりでそれぞれ期を通じて漁場が形成される。伊豆諸島周辺海域では、三宅島周辺、銭洲海域を中心に1歳魚、3歳魚主体で期を通じて漁場が形成される。犬吠以北海域では1歳魚～3歳魚が漁獲される。

年齢別体長は、これまでの体長組成の推移や年齢査定の結果から概ね次の通りである。0歳魚：30 cm以下で20 cm～25 cm主体、1歳魚：25 cm～30 cm前後、2歳魚：27 cm～34 cm、3歳魚：29 cm～37 cm、4歳以上：32 cm以上。（各年級群の体長の範囲は広く重なり合っている）

参 画 機 関

地方独立行政法人 北海道立総合研究機構 水産研究本部 釧路水産試験場 函館水産試験場	和歌山県水産試験場
地方独立行政法人 青森県産業技術センター 水産総合研究所	徳島県立農林水産総合技術支援センター 水産研究課
岩手県水産技術センター	高知県水産試験場
宮城県水産技術総合センター	愛媛県農林水産研究所 水産研究センター
福島県水産試験場	大分県農林水産研究指導センター 水産研究部
茨城県水産試験場	宮崎県水産試験場
千葉県水産総合研究センター	鹿児島県水産技術開発センター
東京都島しょ農林水産総合センター	地方独立行政法人 大阪府立環境農林水産総合研究所 水産研究部 水産技術センター
神奈川県水産技術センター	香川県水産試験場
静岡県水産技術研究所	一般社団法人 漁業情報サービスセンター
愛知県水産試験場 漁業生産研究所	(取りまとめ機関)
三重県水産研究所	国立研究開発法人 水産研究・教育機構 中央水産研究所